

## 第Ⅱ群 座長のまとめ

東邦大大橋病院 耳鼻咽喉科

白井信郎

最近、内服剤や注射剤として作られたアレルギー治療薬を鼻用局所噴霧剤として用いた報告が散見される。第2群の4題はそうしたアレルギー治療薬を鼻腔に噴霧した場合の治療効果についての報告であった。

寺田ら(秋田大)は経口抗アレルギー剤として有効性の高いKetotifenの副作用として出現する眠気をなくする目的で、ネビュライザー療法への応用を考えた。Ketotifen 原末を生食にて0.1 mg/mlになるように溶解し、鼻アレルギー患者に投与し有効性を認めた。なおその際、眠気などの副作用は全く出現せず鼻腔に対する刺激もなかったと報告した。今後局所治療剤として通用させるためには、薬剤の安定性や用法、用量、作用持続時間などの検討とともに、点鼻療法としての有用性についても調べる必要があると思われる。石塚ら(帝京大溝口)はノイロトロピンをネビュライザーにて鼻アレルギー患者に投与し、とくにくしゃみ型に高い有効率が得られたと報告した。ノイロトロピンは鎮痛、鎮静、自律神経調整、抗アレルギー、免疫調整等の広範な薬理作用を有する非蛋白性の活性物質を成分とする注射剤であり、アレルギー性疾患に対しては減感作療法にノイロトロピンを併用することにより、S-IgGの増加とS-IgEの減少を来し、減感作単独治療よりも高い臨床効果を期待できるといわれ、現在通年性鼻アレルギーに対するノイロトロピン併用減感作療法の多施設による臨床試験が行われている最中であるが、本報告は鼻アレルギーに対するノイロトロピン単独の、しかも局所ネビュライザー療法ということで興味もたれた。武安ら(東邦大大橋)はハウスダスト鼻アレルギー患者にヒスタミン加免疫グロブリン製剤リノピンの点鼻療法を行ない、その治療効果をライノグラフで客観的に評価したが、満足すべき結果は得られなかったと報告した。この治療方法については、すでに昨年平川ら(広島大)が第9回日本医用エアロゾル研究会において、100%の有効率が得られたと報告している。両施設におけるこのような差は何によるものであろうか。大越ら(東邦大大橋)は局所噴霧療法に用いられた噴霧器の生体鼻腔内への噴霧状態を放射性同位元素を用いて調べた。その結果、噴霧器によって、噴霧量が異なっていたり、1回噴霧量にむらがあったり、噴霧圧力によっても噴霧量が異なったりすることがわかり、今後は容器自体の適・不適についても検討すべきであると報告した。

以上、内服剤や注射剤による鼻用局所噴霧療法は大体のところ、本来の使い方と同じような治療効果が得られるようであるが、今後は、厳密な症例の選択や脱落症例に対する検討、薬剤に対しては用法、用量、作用持続時間などの検討、さらに噴霧器そのものに対する検討などを加える必要があると思われる。